

## 第15の難関・投書事件「師範教育批判」

もしこの「ifミニ自伝抄」も、以下述べようとする最後の一大事件の如何によっては、その後の私の全運命もどのようになっただろうかと、全く推断を許さぬほどの大事件でございまして、しかもそれは師範卒業の1週間前に勃発したわけでございます。

それというのも、当時特異の評論家としてすでに日本の水準であった方が、当時「信濃毎日」より転じて「新愛知」の主筆となりまして、「緩急車」と名付けた投書欄を作って、広く有志者の投稿を載せて好評を博し、愛知師範の卒業生でも寮佐吉氏は非常な俊英であって、これにしばしば掲載せられたわけでありまして。したがって私もそれに刺激されて、「師範教育改革論」の一文を投書したわけです。

しかるにそれが、卒業式が行われる5日かせいぜい1週間前に、「新愛知」紙上に発表されました。学校当局は文字通り愕然として色を失ったわけです。生来お目出たい私は、かかる大騒動になるとは夢にも知らず、後輩の私が先輩の寮氏の真似をした程度で比較的軽く考え、仮に多少問題となったとしても、せいぜい舎監の説教程度にしか考えていなかったわけです。

しかるに学校当局としては、卒業式には当初の当人が卒業生総代として辞令を一括して受けることになっておりましたが、県庁にも私の名前が通達されていて、今更変更もできないと言うわけでございます。

それ故もしこの投書が、もう10日か2週間も前であれば、私の運命はどうなっていたかもわかりません。四年間級長であったことで、退学は仮に免じられたといえども、卒業延期として、結局卒業が半年は遅れたに相違ありません。

しかしすでに述べたように、私はもともと退学させられた連中とも親しかった事はすでに述べたわけでありまして。要するに私の血の中には、積極的な闘争は好まないけれども消極的には不服従なるものがあり、それで私がガンジーの「非闘争・不服従」に対して、深く「血」の共感を覚えるわけでございます。